

自分と他者との連結からみた心理的距離

— Bionの言う原子価による影響について —

別 所 崇*

Psychological Distance Seen from the Link Between the Self and Other:
A study about the Effect of Valency as Conceived by Bion

Takashi Bessho

要 旨

本研究は、個人の他者とのつながり方が、心理的距離の取り方にどのように反映されるかを、Wilfred Bion (1961) の原子価の概念に基づき検証するものである。

対人関係における自他の距離感には、パーソナル・スペースに代表される物理的距離感と、相手との親密度などに応じて決定される心理的距離感がある。しかし、先行研究にみられる心理的距離の研究では個人の特性や親密さの観点から心理的距離をとらえることが多かったように思われる。

しかし、距離というからには、自分と相手という二者を考える必要がある。そこで本研究では、自分と他者との連結からみた心理的距離を、Bion (1961) の唱えた原子価の概念を利用し、さらにそれを発展させたHafsi (1997, 2006a) の理論をもとに、ある空間における二者間の打ち合わせ場面を想定し、自分と相手の座席選択行動に、どのような違いが見られるかについての仮説を立て、新しく作成した対人心理距離尺度を使用し、原子価の観点からの検証を試みた。

その結果、原子価が心理的距離の取り方に影響を及ぼす、ということが実証された。これにより、本研究では、自分と他者との連結から見た心理的距離についての新たな視点が示唆された。

I. 問題

1. 問題

人間関係を成り立たせる上で、相手との距離の取り方は大変重要である。我々は、相手の社会的立場や、相手との親密さに応じて、知らず知らずのうちに、適当な距離を保とうとしている。このような人間同士の間の距離感について、Hall, E.T. (1966) は、プロクセミクス (Proxemics) という学問を提唱し、人と人が社会的接触を行なうときに、その間にとられる物理的距離の大きさを、密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離の4つに分類し、さらにそれぞれを近接相、遠方相とに分けた。

この人間の持つ距離感がどのように決定されるかは、個人空間 (Personal Space) の問題とも
平成19年9月28日受理 *奈良大学地域連携教育研究センター外部研究員

結びつく。Little, K.B. (1965) は「パーソナル・スペースは、個人の他者との交流の大部分が行われるところ」として定義した。また、Sommer, R. (1969) は、それを「個人の空間は、侵入者が入れないように、その人の身体をとり囲む見えない境界」であるとした。このパーソナル・スペースの構造について、田中 (1973) は実験により、左右に対しては対称で、前後軸に対しては、正面からの角度が増すにつれ、対人距離が減少するという、異方的構造を有することを明らかにした。また日本版MPI (モーズレイ性格検査) を使い、被験者の向性についても分析し、「内向性の者は、どの方向についても外向性の者より大きな距離を取る」ことを明らかにした。さらに、渋谷 (1985) はパーソナル・スペースの形態について考察し、質問紙で測定したパーソナル・スペースは、実験で測定したものより大きく、異性に対するパーソナル・スペースは、同性の場合より大きい、未知の人に対するパーソナル・スペースは、既知の人の場合より大きい、といった結果を得た。

一方、対人関係における自他の距離には、パーソナル・スペースのような物理的な対人距離と、相手との親密度などに応じて決定される、心理的な対人距離がある。これは心理的距離 (Psychological distance) と呼ばれており、いくつかの研究が行われている。

例えば山根 (1987) は、心理的距離の体験構造として、能動表出 (自己の行動が表現する心理的距離)、能動表象 (自己の実感的心理的距離)、受動表出 (相手の行動が表現する心理的距離)、受動表象 (相手が実感していると思われる心理的距離) の4側面を挙げている。別の論文 (山根, 1995) では、心理的距離を規定する要因として、個人的要因と社会的・関係的要因をあげ、個人的要因をクレッチマーの気質類型論と関連づけている。

また、教師と生徒との心理的距離について研究を重ねてきた山口ら (1991) は、矢田部・ギルフォード性格検査を利用して、心理的距離と性格特性との関連性について分析し、養護教諭との心理的距離に、生徒の性格類型が反映されることを見出した。そして心理的距離を「ある人とある人との間に存在する二者間の親密度・親和性・親近感の度合いや程度を表す概念」(山口, 2004) と定義している。

その他、青年期の友人関係、親子関係における心理的距離の研究が、近年多く見られ、金子 (1989) は、青年期女子を対象に、父親・母親・親友との心理的距離を測る尺度を用い、その特徴を考察し、青年期女子では、「片方の親と親密なものほど、もう片方の親にも親密感を持っていることが多く」、「女子大生においては、母親 (同性の親) への同一化の程度が、親友 (同性の友人) への好意的な態度ともかかわってくるのではないかと推測している。また、上野ら (1994) は、青年期の交友関係における、友人への同調と友人との心理的距離のとり方について焦点をあて、質問紙の分析から、「友人と内面的には心理的距離をとりたいと考えながら、行動的には同調的であろうとする青年が存在している」という結果を明らかにした。さらに、天貝 (1996) は、友人関係における心理的距離について考察し、心理的距離は他者との親密さの程度 (親密性) と他者との融合の程度 (依存性) の両面から成り立つとしている。

以上のように、心理的距離に関する先行研究を概観してみると、心理的距離を、個人の特性や、相手との親密度に基づいてとらえていることが多いように思われる。しかしながら、二者間の距離には、当事者と相手が必要である。よって個人の特性、つまり個人がどうであるかという見方

だけでは、もう一方の相手を考慮しているとは言えない。そこで、本研究では個人と他者との関係のあり方、つまり他者とつながるための特性からみた心理的距離を、Bion (1961) と Hafsi (1997, 2006a) の原子価の理論を使って明らかにしてみたい。

2. 原子価の理論

Bion (1961) は、対人関係あるいは個人と他者とのつながり方を説明するのに、化学の用語である「原子価 (Valency)」を用い説明しようとした。Bionは原子価を「確立した行動パターンを通じて、他者と瞬間的に結合する個人の能力」であり、「基本的想定 (basic assumption) を創り出したり、行動化したりするためにグループと結合していくための個人の準備状態」と定義している。Bionは、あらゆるグループ活動には、2つの心的側面があるとした。1つは、意識的で現実的側面を持つ「作動グループ (work group)」、もう1つは無意識的で幻想中心の「基本的想定グループ (basic assumption group)」である。基本的想定とは、基本的想定グループにおいて、グループメンバーに共有される幻想のことである。さらにHafsi (2006b) は、Bionの定義を統合しながら、原子価を「グループメンバーだけではなく、全ての対人関係に対する個人の反応パターン」と再定義した。また、Bionは原子価の類型として、「依存」、「闘争・逃避」、「つがい」の3つの種類があることを示唆した。しかしHafsi (1997) は、Bionが同一であると分類した「闘争・逃避」原子価を、共通性はあるものの、対人関係の持ち方やグループ状況に対する反応などに、相違がみられるとし、「闘争」と「逃避」とに分類した。本稿ではHafsiの分類にならない、原子価の類型を「依存」、「闘争」、「逃避」、「つがい」の4つとして論を進める。

以下は、各原子価の主な特徴である。

依存 (Dependency) : 自己評価が低く、他者を過剰評価する、相互作用的依存がみられる、先輩・後輩や上司・部下といった縦的人間関係を好む、など。つまり、様々な面で他者が自分より優れていると無意識的・意識的に考えるので、他者とつながるためには、その人に頼っていくしかないと思って行動する傾向がある。

闘争 (Fight) : 常に敵を意識する強い競争心、攻撃性、高い自己評価、自己主張、など。したがって、議論や討論を好み、競争したり批判したりするために、他者との接触を求めるかのようにも見える。そのため、他者との関係やグループ活動下において、グループの凝集性を重視し、リーダーシップを発揮する傾向を持つ。

逃避 (Flight) : 他者に対する不信感が強く、他者との競争や葛藤を避けるため、他者との間に一定の心理的および物理的距離を保とうとする傾向がある。そのため、責任のある地位を避ける傾向が強い。また、人に依存することは、迷惑なことであると感じるので、一見して内向的かつ冷たそうに見える。

つがい (Pairing) : 他者との親密な対人関係を好み、大人数より少人数のグループを好む。異

性に対しては積極的に振る舞う傾向が見られる。グループ活動において、横の関係を重視する平等主義の傾向が強く、また、未来志向の楽観主義者が多いという傾向がある。

Hafsi (2006b) によれば、個人には水準は異なるが、全ての原子価が備わっている。さらに、個人には1つの主要な原子価である「活動的原子価 (active valency)」および、3つの「補助的原子価 (auxiliary valency)」がある。この活動的原子価は、人が対人関係において最も頻繁に示す原子価で、個人はこの原子価に沿った行動を示す。また、何らかの理由で活動的原子価が示せないときに用いられるのが、補助的原子価である。この補助的原子価によって、人は多くの異なる対人関係場面に反応したり、適応したりすることができる。これには、「適応機能」と「補助的機能」の2つの側面があると考えられる。「適応機能」とは、活動的原子価が阻止されるような状況に置かれた場合、一時的に他の原子価を用いて、その状況に適応していくことができるための機能である。また「補助的機能」によって、人は自分の活動的原子価に基づいて振る舞いながら、状況に応じて一定の補助的原子価の側面を示し、対象との関係を維持したり、強化したりすることができる。

Hafsi (2006b) は、原子価が対人関係で引き起こす否定的な影響を明らかにすることを目的に、原子価の概念をさらに展開させ、「マイナス原子価 (-V)」という新しい概念を提唱している。-V は本来の原子価とは逆の機能を果たす心的傾向を意味し、一方的かつ攻撃的に対象とつながろうとすることによって、病理的な対象 (対人) 関係を引き起こすものである。Hafsi は、これを精神障害、特にパーソナリティ障害と密接に関連しているものとして示唆している。

3. 本研究の目的

個人は自らの活動的原子価によって行動し、個人やグループとの関係を築いていく。Hafsi (2006a) は、その活動的原子価が、個人の物理的・社会的環境に関する考え方、人との接触の仕方、グループにおけるいろいろな活動、人間関係のあり方などに反映されるとしている。例えば、船越 (2006) は、活動的原子価が友人選択にどう影響を及ぼすかを研究し、人は同じ原子価を持つ人間を友人として選択するケースが多いという結果を示した。

そこで、本研究では対人関係における心理的距離の取り方にも、個人の持つ原子価が影響するであろう、という基本的な仮説を立てた。本研究の目的は、以下に述べる原子価と距離との関係に関する諸仮説を吟味することである。

4. 本研究の仮説

本研究の具体的な仮説は、以下の通りである。

第一仮説：依存の原子価を持つ人 (以下、DVP) は、普遍的に他者との距離が近いであろう。

第二仮説：闘争の原子価を持つ人 (以下、FVP) は、「気の合いそうにない人」は遠くに、「気の合いそうな人」は近くに置くであろう。

第三仮説：逃避の原子価を持つ人 (以下、FIVP) は、普遍的に他者との距離が遠いであろう。

第四仮説：つがいの原子価を持つ人（以下、PVP）は、「気の合いそうな人」や「異性の人」との距離が近いであろう。

以上の仮説を検証するために、次のような方法を用いた。

Ⅱ. 方法

前述したように、これまでの心理的距離の研究では、個人が持つ特性や親密度からみた距離感が主な研究対象であり、自分と他者との連結から見た心理的距離についての研究は少ないと言える。そのため、対人交渉場面において、一般的にある、二者間で打ち合わせを行なうという状況を設定し、ある部屋に配置された5つの座席のどこに自分と相手を座らせるか、という座席選択行動についての尺度を作成し、各個人の原子価がどのように反映されるかを検証しようと試みた。

1. 対象

本調査に参加したのは、大学で心理学の授業を受講している大学生124名（男子=73〈58.9%〉, 女子=51名〈41.1%〉, 平均年齢20.1歳〈SD=1.41〉）である。

2. 尺度の概要

1) Valency Assessment Test (VAT)

まず、個人の原子価を測るため、Valency Assessment Test (VAT) という文章完成式のテストを使用した。これは、Stock&Thelen (1958) によって開発されたRGST (Reaction to Group Situation Test) に基づいてHafsi (1997) が改訂したRGST-Nu (Reaction to Group Situation Test~奈良大学版) を、さらにHafsi (2007) が改訂したものである。

このテストは、Bion (1961) やHafsi (1997, 2006a) による原子価、つまり対人関係において個人が他者に対して示す反応パターンや、他者とのつながり方を測定するものである。VATの項目は、依存、闘争、つがい、逃避の4つの原子価の類型、およびグループ活動への貢献、すなわちBionの言う「協同 (Cooperation)」、あるいはHafsiの言う「協同指標 (Cooperation Index)」に関するものである。各原子価と協同指標それぞれにつき5項目、合計25項目がランダムに配置されている。

実施後、被験者の記述（反応）に基づいて採点が行われた。採点は「反応の性質」と、「反応の表現方法」の2つの基準に則して行われる。反応の性質には「否定的な反応」と「肯定的な反応」とがあり、反応の表現方法には「明白な行動」、「曖昧な行動」、「感情的」、「知性的」の4つがある。採点にあたっては、まず反応の性質を分類し、その後反応の表現方法によって、下記のように得点化を行った。

- ・「否定的明白な行動」を1点

- ・「否定的曖昧な行動」を2点
- ・「否定的感情的反応」を3点
- ・「否定的知性的反応」を4点
- ・「肯定的知性的反応」を5点
- ・「肯定的感情的反応」を6点
- ・「肯定的曖昧な行動」を7点
- ・「肯定的明白な行動」を8点

最後に各項目の合計点を項目数で割り、算出された数値の最も高いものを、被験者の活動的原子価とした。

2) 対人心理距離尺度

次に本研究の目的である、心理的距離の測定のために、対人心理距離尺度 (別所, 2007) を使用した。

尺度の作成: 対人心理距離尺度の作成にあたっては、天貝 (1996)、美山 (2003) に見られるような、線分上に自分と他者との距離を書き込ませる方法や、板井 (2001) による、自分と他者における最適な距離と思われる場所に、シールを貼り付ける方式、などを参考にした。

一方、対人距離の表れの1つとしての座席選択行動と、心理的特性についての研究がこれまで重ねられてきた。Sommer (1969) は、様々な座席配置の心理的な近さについて言及し、Pedersen, D.M. (1994) は、カリフォルニア人格検査 (CPI) を用いて、学生の着席位置と性格との関係を明らかにしようとした。

本研究ではそれらを参考に、原子価の対人関係における特徴が、心理的距離にどのように反映されるかを測定するため、新しく作成した対人心理距離尺度を用いて、ある条件下における、自分と他者の座席選択について回答を求めた。

[Figure 1 参照]

尺度の形式: この対人心理距離尺度では、「あなたはゼミの飲み会の打ち合わせで、これからAさん、Bさん、Cさん、Dさんの4人の人と会うことになりました。」という状況のもと、以下の教示に従って、A~Dの順番で回答を求めた。

「あなたはまず、△さんと会うことになりました。残りの3人はあとで来ます。会場の座席配置は下図のようになっています。あなたはどの席に座りますか? ○印に×印をつけて下さい。そして△さんはどこに座ってもらいたいですか? その○印にアルファベットを記入して下さい。」

このように、あらかじめ印刷されたある部屋における5つの座席に、まず自分の座る位置を決めさせ、そののちにAの人物の座る位置について記入させ、以後B、C、Dについても同様に、自分の座る位置と、相手の座る位置を記入させた。A~Dの4つの条件については、属性を以下のように設定した。

Aさん：「気が合いそうにない人」

Bさん：「気が合いそうな人」

Cさん：「異性の人」

Dさん：「初めて会った人」

同時に、なぜその人物をそこに座らせたのかを、それぞれについて、自由に記述させた。その際、できるだけ具体的な回答を求めるため、「なんとなく」や「余り」といった回答はやめるよう指示した。

3. 手続き

VATは、2006年7月に、心理学の授業が行なわれている教室で、受講者に対して集団で実施し、回答終了後すぐに回収した。実施の際、25項目を約20秒間隔で検査者が読みあげ、対象には深く考えることなく、時間内で回答することを求めた。テストの所要時間は約15分間である。

対人心理距離尺度は、2006年7月と10月に、心理学の授業を通じて受講者に配布し、1週間後に回収する方式で実施した。

Ⅲ. 結果

1. VATからみた対象の分布

被験者の大学生124名を原子価ごとに分類するために、前述した方法によりVATを採点した。採点した結果は、DVP 61名 (49.2% <男子34名、女子27名>)、FVP 28名 (22.6% <男子16名、女子12名>)、FIVP 13名 (10.5% <男子11名、女子2名>)、PVP 22名 (17.7% <男子12名、女子10名>)であった。

2. 対人心理距離尺度の分析

1) 自分自身の座席配置

対人心理距離尺度において、自分自身の座席をどこに配置したのかをFigure2のように座席番号で示し、原子価との間でクロス集計を行なった。Table1はその結果をまとめたものである。

[Figure 2 参照]

相手が「気が合いそうにない人 (A)」の場合、DVPは、座席番号2を選択する人が32名 (53.3%)、FVPは、座席番号3を選択する人が18名 (64.3%)、FIVPは、座席番号5を選択する人が6名 (46.2%)、PVPは、座席番号1を選択する人が8名 (36.4%)で、それぞれ最も多かった。

相手が「気が合いそうな人 (B)」の場合、DVPは、座席番号5を選択する人が20名 (32.8%)、FVPは、座席番号3を選択する人が11名 (39.3%)、FIVPは、座席番号3と5を選択する人が各4名 (30.8%)、PVPは、座席番号3と5を選択する人が各6名 (27.3%)で、それぞれ最も多かった。

相手が「異性の人 (C)」の場合、DVPは、座席番号5を選択する人が22名 (36.1%)、FVPは、

座席番号 3 を選択する人が11名 (39.3%)、FIVPは、座席番号 5 を選択する人が 7 名 (53.8%)、PVPは、座席番号 5 を選択する人が 7 名 (31.8%) で、それぞれ最も多かった。

相手が「初めて会った人 (D)」の場合、DVPは、座席番号 5 を選択する人が18名 (30.0%)、FVPは、座席番号 1 を選択する人が 8 名 (28.6%)、FIVPは、座席番号 5 を選択する人が 6 名 (46.2%)、PVPは、座席番号 3 を選択する人が 6 名 (27.3%) で、それぞれ最も多かった。

χ^2 検定の結果、相手が「気が合いそうにない人 (A)」の場合にのみ原子価と自分自身の座席配置との間に、有意な関係が見られた ($\chi^2(12)=58.32, p<.0001$)。すなわち、相手が「気が合いそうにない人 (A)」の場合、DVPは座席番号 2 を、FVPは座席番号 3 を、FIVPは座席番号 5 を、PVPは座席番号 1 を、それぞれ自分自身の座席配置として選んでいると言える。しかし、相手が「気が合いそうにない人 (A)」以外の場合は、原子価による自分の座席選択に、有意な関係は見られなかった。また、座席番号ごとで見ると、相手がいずれの人物の場合も、座席番号 4 を選択する人の数は少なかった。(A-4: 11名 <8.9%>、B-4: 4名 <3.2%>、C-4: 7名 <5.6%>、D-4: 7名 <5.7%>)

Table 1. 自分自身の座席配置

条件 (相手)	原子価	座席番号				
		1	2	3	4	5
気が合いそうに ない人 (A)	依存	7 (11.7)	32 (53.3)	8 (13.3)	8 (13.3)	5 (8.3)
	闘争	1 (3.6)	1 (3.6)	18 (64.3)	2 (7.1)	6 (21.4)
	逃避	2 (15.4)	3 (23.1)	2 (15.4)	0 (0)	6 (46.2)
	つがい	8 (36.4)	6 (27.3)	4 (18.2)	1 (4.5)	3 (13.6)
気が合い そうな人 (B)	依存	13 (21.3)	17 (27.9)	10 (16.4)	1 (1.6)	20 (32.8)
	闘争	4 (14.3)	10 (35.7)	11 (39.3)	1 (3.6)	2 (7.1)
	逃避	2 (15.4)	2 (15.4)	4 (30.8)	1 (7.7)	4 (30.8)
	つがい	4 (18.2)	5 (22.7)	6 (27.3)	1 (4.5)	6 (27.3)
異性の人 (C)	依存	11 (18.0)	14 (23.0)	11 (18.0)	3 (4.9)	22 (36.1)
	闘争	6 (21.4)	6 (21.4)	11 (39.3)	2 (7.1)	3 (10.7)
	逃避	0 (0)	0 (0)	5 (38.5)	1 (7.7)	7 (53.8)
	つがい	4 (18.2)	4 (18.2)	6 (27.3)	1 (4.5)	7 (31.8)
初めて 会った人 (D)	依存	9 (15.0)	17 (28.3)	15 (25.0)	1 (1.7)	18 (30.0)
	闘争	8 (28.6)	6 (21.4)	7 (25.0)	3 (10.7)	4 (14.3)
	逃避	0 (0)	2 (15.4)	4 (30.8)	1 (7.7)	6 (46.2)
	つがい	5 (22.7)	4 (18.2)	6 (27.3)	2 (9.1)	5 (22.7)

Note: 数値は度数と () 内はパーセンテージを示す。

2) 条件別に見た原子価と距離の取り方の関係

原子価と 4 人の人物との距離の取り方について検討するため、原子価を固定因子、それぞれの相手との距離を従属変数とした、一元配置分散分析を行なった。自分と相手との距離については、Sommer (1969)、小俣 (1992)、松尾 (1993) の研究を参考に、Figure 3-6のように自分自身を

配置した座席を基準にして、4人の人物との距離を、1：近い、2：やや近い、3：やや遠い、4：遠い、の4段階に分けて数値化した。Table 2は、その結果をまとめたものである。なお、座席番号4に自分を配置した分については、前述の通り選択する被験者が少なかったため、数値化するときに省略した。

[Figure 3-6 参照]

「気が合いそうにない人 (A)」に対する距離の取り方については、一元配置分散分析の結果、原子価ごとに有意な差がみられた ($F(3,124)=7.09; p<.0001$)。すなわち、つがい、依存、闘争、逃避の順に距離が近いと言えよう。

「気が合いそうな人 (B)」に対する距離の取り方については、一元配置分散分析の結果、原子価ごとに有意な差がみられた ($F(3,124)=8.39; p<.0001$)。すなわち、依存、闘争、つがい、逃避の順に距離が近いと言えよう。

「異性の人 (C)」に対する距離の取り方については、一元配置分散分析の結果、原子価ごとに有意な差がみられた ($F(3,123)=4.81; p<.003$)。すなわち、つがい、依存、闘争、逃避の順に距離が近いと言えよう。

「初めて会った人 (D)」に対する距離の取り方については、一元配置分散分析の結果、原子価ごとに有意な差がみられた ($F(3,123)=7.10; p<.0001$)。すなわち、依存、闘争、逃避、つがいの順に距離が近いと言えよう。

Table 2. 条件別に見た原子価と距離の取り方の関係

条件 (相手)	原子価の類型				
	依存	闘争	つがい	逃避	
気が合いそうにない人 (A)	2.90 (1.03)	3.13 (0.95)	2.25 (0.97)	3.77 (0.44)	**
気が合いそうな人 (B)	2.13 (0.77)	2.41 (0.97)	2.86 (1.01)	3.31 (0.85)	**
異性の人 (C)	2.36 (0.85)	2.69 (0.97)	2.15 (0.88)	3.23 (0.93)	*
初めて会った人 (D)	2.17 (0.83)	2.32 (0.80)	3.05 (0.90)	2.85 (0.80)	**

Note: 数値は平均値と () 内は標準偏差を示す。

*= $p<.003$ **= $p<.0001$

3) 条件ごとに原子価に即して分類した配置理由

4人の人物について、どうしてそこに配置したのかの理由については、自由記述の回答を臨床心理学専攻の教授1名と、院生3名の合計4名で検討し、記述された内容を、依存的、闘争的、逃避的、つがいの順に分類した。その後、原子価とそれぞれの理由とでクロス集計を行なった。Table 3は、その結果をまとめたものである。

「気が合いそうにない人 (A)」については、それぞれの理由について χ^2 検定の結果、有意な関係が見られた ($\chi^2(9)=40.06, p<.0001$)。すなわち、DVPは依存的な理由を、FVPは闘争的な理由を、FIVPは逃避的な理由を、PVPはつがいの理由をそれぞれ選んでいると言えよう。

「気が合いそうな人 (B)」については、それぞれの理由について χ^2 検定の結果、有意な関係が見られた ($\chi^2(9)=52.86, p<.0001$)。すなわち、DVPは依存的な理由を、FVPはつがいの理由を

Table 3. 条件ごとに原子価に即して分類した配置理由

条件 (相手)	理由	原子価の類型				
		依存	闘争	つがい	逃避	
気が合いそうにない人 (A)	依存的	32	4	5	4	**
		52.5	14.3	22.7	30.8	
	闘争的	8	12	2	1	
		13.1	42.9	9.1	7.7	
	つがいの	10	4	10	0	
16.4		14.3	45.5	0.0		
逃避的	11	8	5	8		
		18.0	28.6	22.7	61.5	
気が合いそうな人 (B)	依存的	38	7	4	2	**
		62.3	25.0	18.2	15.4	
	闘争的	0	1	1	0	
		0.0	3.6	4.5	0.0	
	つがいの	20	20	14	4	
32.8		71.4	63.6	30.8		
逃避的	3	0	3	7		
		4.9	0.0	13.6	53.8	
異性の人 (C)	依存的	31	6	3	1	*
		50.8	21.4	13.6	8.3	
	闘争的	3	0	1	0	
		4.9	0.0	4.5	0.0	
	つがいの	20	10	10	5	
32.8		35.7	45.5	41.7		
逃避的	7	12	8	6		
		11.5	42.9	36.4	50.0	
初めて会った人 (D)	依存的	32	3	3	1	**
		53.3	10.7	13.6	7.7	
	闘争的	3	13	1	2	
		5.0	46.4	4.5	15.4	
	つがいの	20	8	13	4	
33.3		28.6	59.1	30.8		
逃避的	5	4	5	6		
		8.3	14.3	22.7	46.2	

Note: 数値は度数と () 内はパーセンテージを示す。囲みは最も多い度数を示す。

*-p<.002 **-p<.0001

由を、FIVPは逃避的な理由を、PVPはつがいの理由をそれぞれ選んでいると言えよう。

「異性の人 (C)」については、それぞれの理由について χ^2 検定の結果、有意な関係が見られた ($\chi^2(9)=25.52, p<.002$)。すなわち、DVPは依存的な理由を、FVPは逃避的な理由を、FIVPは逃避的な理由を、PVPはつがいの理由をそれぞれ選んでいると言えよう。

「初めて会った人 (D)」については、それぞれの理由について χ^2 検定の結果、有意な関係が見られた ($\chi^2(9)=54.63, p<.0001$)。すなわち、DVPは依存的な理由を、FVPは闘争的な理由を、FIVPは逃避的な理由を、PVPはつがいの理由をそれぞれ選んでいると言えよう。

Ⅳ. 考察

本論文では、自分と他者という二者間における心理的距離に他者とつながるために個人が持つ特性としての、原子価がどう影響するかを考察することを試みた。最初に心理的距離に関する先行研究を紹介した。次に本稿を記述するにあたっての理論的背景として、Bion (1961) と Hafsi (1997, 2006a) による、原子価の理論について記述し、原子価の類型に基づいた、個人の心理的距離の取り方に関する仮説を提示した。その上で、新しく作成した対人心理距離尺度を使用し、そこからみた心理的距離とVATによって測定した原子価との関係を明らかにした。

それによると、DVPは4つの条件いずれについても、距離の取り方が近いことがわかった。しかし、「気が合いそうにない人 (A)」と「異性の人 (C)」は、他の原子価と比べ、最も近いとは言えず、第一仮説は部分的に検証された。これはDVPが、人に対して相互的依存によってつながろうとする傾向にある、という特徴によると考えられる。また、相手ごとの配置理由においては、全ての条件に、依存的な理由を挙げていることがわかった。次にFVPは、「気が合いそうにない人 (A)」を最も遠く、以下、「異性の人 (C)」、「気が合いそうな人 (B)」、「初めて会った人 (D)」の順に、距離が近かった。よって、「気が合いそうにない人 (A)」を最も遠くに配置はしているものの、「気が合いそうな人 (B)」との距離は最も近いわけではなく、第二仮説は部分的に検証された。これはFVPが、人に対して相互的対立によってつながろうとする傾向にある、という特徴によると考えられる。また、相手ごとの配置理由では、「気が合いそうにない人 (A)」と「初めて会った人 (D)」には闘争的な、「気が合いそうな人 (B)」にはつがいの、「異性の人 (C)」には逃避的な理由を挙げていることがわかった。次にFIVPは、4つの条件いずれについても、距離の取り方が遠いことがわかった。しかし、「初めて会った人 (D)」は、他の原子価と比べ、最も遠いとは言えず、第三仮説は部分的に検証された。これはFIVPが、人と距離を置く傾向がある、という特徴によると考えられる。また、相手ごとの配置理由においては、全ての条件に、逃避的な理由を挙げていることがわかった。最後にPVPは、「異性の人 (C)」を最も近く、以下、「気が合いそうにない人 (A)」、「気が合いそうな人 (B)」、「初めて会った人 (D)」の順に、距離が遠かった。よって、「異性の人 (C)」を最も近くに配置しているものの、「気が合いそうな人 (B)」がそれに次ぐとは言えず、第四仮説は部分的に検証された。これはPVPが、人(特に異性)に対して親密なつながりを持とうとする傾向がある、という特徴によると考えられる。また、相手ごとの配置理由においては、全ての条件に、つがいの理由を挙げていること

がわかった。

以上のように、全ての仮説は部分的には検証されなかったものの、対人心理距離尺度のそれぞれの条件（気が合いそうにない人、気が合いそうな人、異性の人、初めて会った人）との関係において、原子価が距離の取り方に影響を及ぼしており、対人関係における心理的距離の取り方にも、個人の持つ原子価が影響するであろう、という基本的な仮説は、検証されたと言えるだろう。

本研究によって示唆された結果は、今後対人関係の生じる様々な分野に応用することができるだろう。特に対人関係の希薄さが指摘されている青年期では、長沼・落合（1999）が「相手とどのように心理的距離をとるかということが、現代青年の友人関係においては重要なポイントとなっている」と指摘しているように、相手との心理的距離の取り方に関する問題を多く抱えている。また、学校教育の現場でも、教師と児童・生徒との関係、あるいは同性・異性の友人関係の問題が、大きな比重を占めている。今後さらに研究を進め、人と人とのつながりにおいてみた心理的距離の取り方が、よりよい対人関係を構築するためのヒントとなるようにしていきたい。

しかしながら、今回の調査では、質問紙による回答を求めたため、実際の被験者の心理的距離をうまく反映できたかに不満が残る。そのため、今後は対人心理距離尺度の場面を再現した実験を実施したり、観察による調査を行ったりして、より実験的な手法を試みる必要があるだろう。また、今回124名の被験者の協力の下、データを収集し、分析を行ったが、全体数も少なく、かつ原子価の比率を見ても、「逃避」原子価の数が少なく、原子価間のバランスがいいとは言えない。この問題を解決するためには、今後被験者の数を増やし、被験者の原子価の比率も一定にした上で、分析をしていく必要があるだろう。

一方、データの扱い方についてであるが、本研究において、それぞれの人物を配置した理由の自由記述を、原子価に即して分類したが、それに基づいて選択式の項目を作成し、自由記述に換えた、新たな質問紙の作成を行っていくことや、自由記述を様々な観点から分析をしていくことも必要だろう。また、今回の調査では、被験者が自分自身を配置した座席に対し、4人の相手を隣・正面といった、どのような位置に配置したかは、分析の対象としなかった。この点については、引き続き分析を進め、原子価ごとの特徴を導き出すことが必要であろう。いずれも今後の課題としたい。

参考文献

- Bion, W.R. (1961) *Experiences in groups and other papers*. New York: Basic Books. (池田数好/訳 (1973) 「集団精神療法の基礎」岩崎学術出版社)
- Hafsi, M. (1997) Valency and its measurement : Validating a Japanese version of the reaction to group situation test (RGST). *Psychologia-An International Journal of Psychology in the Orient*, Vol.XL, No.3, 152-162.
- Hafsi, M. (2003) 「ピオンへの道標」ナカニシヤ出版
- Hafsi, M. (2004) 「「愚かさ」の精神分析 ピオンの観点からグループの無意識を見つめて」ナカニシヤ出版
- Hafsi, M. (2006a) The Chemistry of Interpersonal Attraction : Developing Further Bion's concept of "valency". 奈良大学紀要34, 87-112.

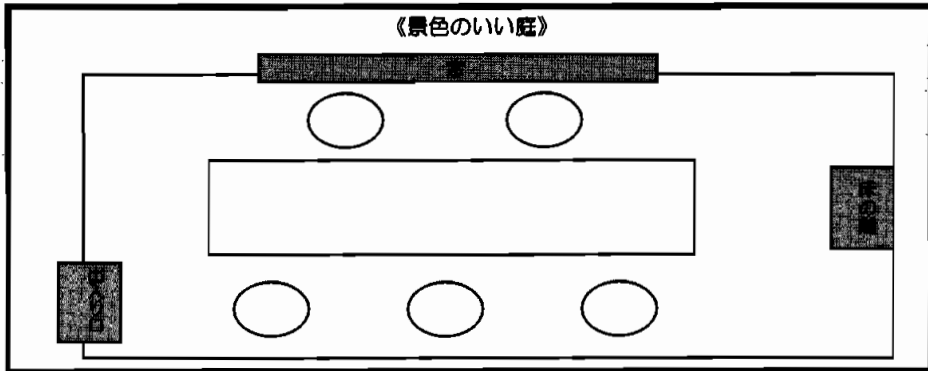
- Hafsi, M. (2006b) 対象関係の病理学を理解する頂点としての「マイナス原子価」～あるマイナス依存原子価を持った男性の事例～ *プシコフィリア研究* 3, 3-15.
- Hafsi, M. (2007) The Valency Assessment Test (VAT) : Developing and testing a new measurement tool for human bond. *総合研究所報* 15, 59-71.
- Hall, E.T. (1966) *The hidden dimension*. (日高敏隆・佐藤信行/共訳 (1970)「かくれた次元」みすず書房)
- Little, K.B. (1965) Personal Space. *Journal of Experimental Social Psychology* 1, 237-247.
- Pedersen, D.M. (1994) Personality and classroom seating. *Perceptual and Motor Skills* 78, 1355-1360.
- Sommer, R. (1969) *Personal Space : The behavioral basis of design*. (橋山貞登/訳 (1972)「人間の空間デザインの行動的研究」鹿島出版会)
- Stock, D., & Thelen, H.A., (1958) *Emotional dynamics and group Culture : Experimental studies and group behavior*. New York: New York University Press.
- 対人行動学研究会編 (1986)「対人行動の心理学」誠信書房
- 天貝由美子 (1996) 中・高生における心理的距離と信頼感との関係 *カウンセリング研究* 29, 130-134.
- 板井修一 (2001) 看護学生の老人に対する心理的距離 *筑紫女学園大学紀要* 13, 281-299.
- 上野行良・上瀬由美子・松井豊・福富護 (1994) 青年期の交友関係における同調と心理的距離 *教育心理学研究* 42 (1), 21-28.
- 小俣謙二 (1992) 日本人学生の座席選択にみられる特徴 *名古屋文理短期大学紀要* 17, 9-16.
- 金子俊子 (1989) 青年期女子の親子・友人関係における心理的距離の研究 *青年心理学研究* 3, 10-19.
- 渋谷昌三 (1985) パーソナル・スペースの形態に関する一考察 *山梨医科大学紀要* 2, 41-49.
- 訖摩武俊・瀧本孝雄・鈴木乙史・松井豊共著 (1990)「性格心理学への招待【改訂版】自分を知り他者を理解するために」サイエンス社
- 田中政子 (1973) Personal Spaceの異方的構造について *教育心理学研究* 21 (4), 223-232.
- 長沼恭子・落合良行 (1999) 長沼・落合論文へのコメントを頂いて *青年心理学研究* 11, 71-74.
- 船越弘子 (2006) あなたはどのような友人と付合っているか—友人選択における原子価の影響について— *奈良大学大学院研究年報* 11, 45-54.
- 別所崇 (2007) 対人心理距離尺度作成の過程及び対人心理距離に関する一仮説の呈示～「原子価」の観点からの検討～ *奈良大学大学院研究年報* 12, 115-122.
- 松尾貴司 (1993) 座席選択に関する調査研究 *愛知淑徳短期大学研究紀要* 32, 73-79.
- 美山理香 (2003) 大学生の友人との心理的距離に関する基礎的研究 *九州大学心理学研究* 4, 27-35.
- 山口正二・小島弘史・原野広太郎 (1991) 性格類型に規定される心理的距離に関する研究 *カウンセリング研究* 24(1), 11-17.
- 山口正二 (2004) 生徒と教師の心理的距離に関する実証的研究—最適な心理的距離・自己概念・学校適応からの検討— *カウンセリング研究* 37(1), 8-14.
- 山根一郎 (1987) 心理的距離と面識度水準の効果にもとづく対人経験の分析 *心理学研究* 57(6), 329-334.
- 山根一郎 (1995) 対人心理距離のモデル化 *相山女学園大学研究論集* 26 (社会科学篇), 1-13.
- 山根一郎 (2005)「私とあなたの心理的距離—その社会心理学から存在論へ—」青山社

付記

本論文を作成するにあたり、いろいろとご指導をいただきました、奈良大学社会学部心理学科Med Hafsi教授に心より感謝いたします。また、貴重なアドバイスをいただいた、心理学科の多くの先生方に、末筆ながらお礼を申し述べさせていただきます。

《調査 1-2》

教示：あなたはまず「気が合いそうなBさん」と会うことになりました。残りの3人はあとで来ます。会場の座席配置は下図のようになっています。あなたはどの席に座りますか？○印に×印をつけて下さい。そして「気が合いそうなBさん」はどこに座ってほしいですか？その○印にBのアルファベットを記入して下さい。

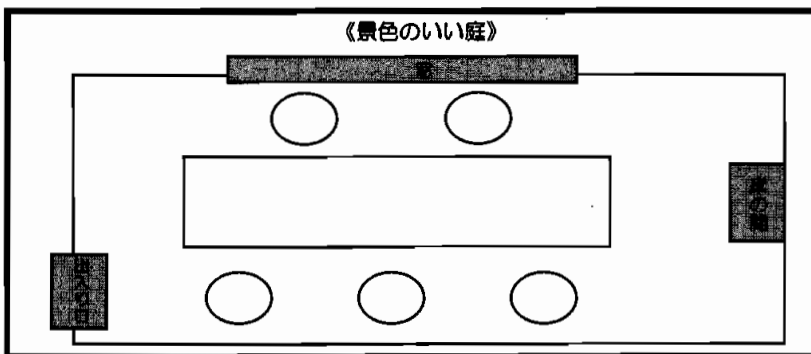


質問：上記で配置したBさんの位置について、どうしてそこに配置したかの理由をできるだけ具体的に枠内に自由に記入して下さい。「なんとなく」や「余り」といった回答はやめて下さい。

Bさんを配置した理由

《調査 1-3》

教示：あなたはまず「異性のCさん」と会うことになりました。残りの3人はあとで来ます。会場の座席配置は下図のようになっています。あなたはどの席に座りますか？○印に×印をつけて下さい。そして「異性のCさん」はどこに座ってほしいですか？その○印にCのアルファベットを記入して下さい。

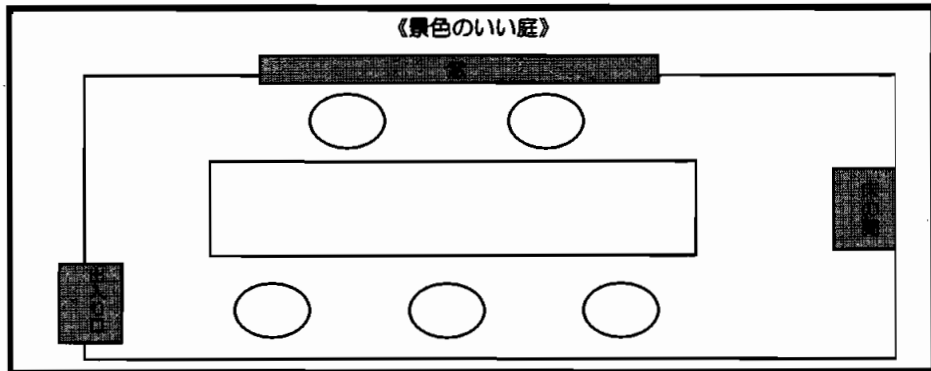


質問：上記で配置したCさんの位置について、どうしてそこに配置したかの理由をできるだけ具体的に枠内に自由に記入して下さい。「なんとなく」や「余り」といった回答はやめて下さい。

Cさんを配置した理由

《調査 1-4》

教示：あなたはまず「初めて会ったDさん」と会うことになりました。残りの3人はあとで来ます。会場の座席配置は下図のようになっています。あなたはどの席に座りますか？○印に×印をつけて下さい。そして「初めて会ったDさん」はどこに座ってもらいたいですか？その○印にDのアルファベットを記入して下さい。



質問：上記で配置したDさんの位置について、どうしてそこに配置したかの理由をできるだけ具体的に枠内に自由に記入して下さい。「なんとなく」や「余り」といった回答はやめて下さい。Dさんを配置した理由

質問は以上になります。ご協力ありがとうございました。

調査担当者：大学院社会学研究科 臨床心理学コース 修士課程2年 別所 崇

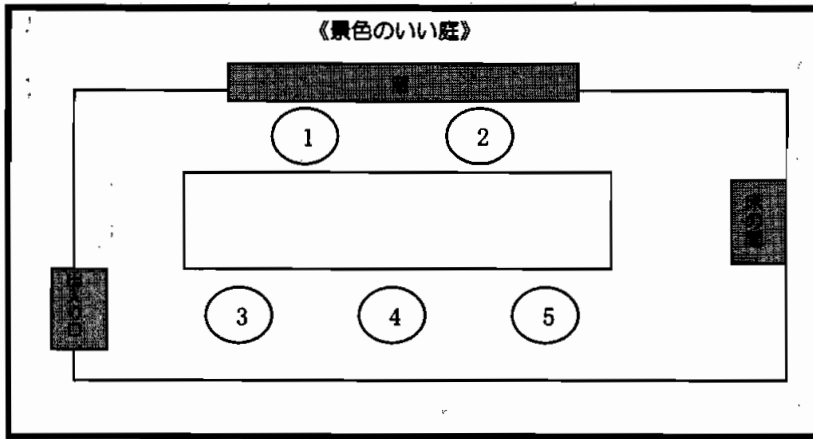
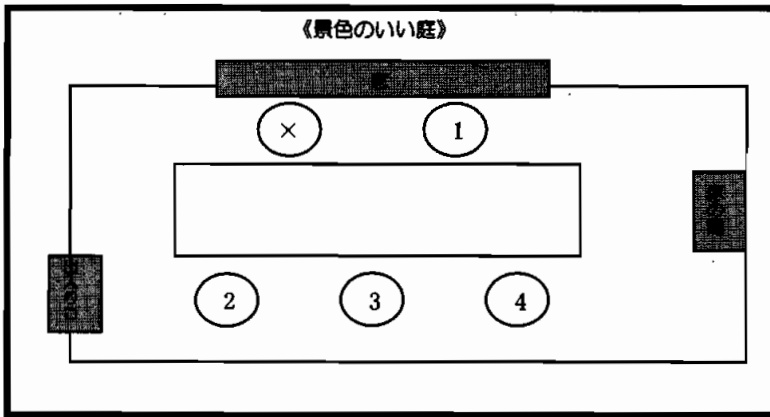
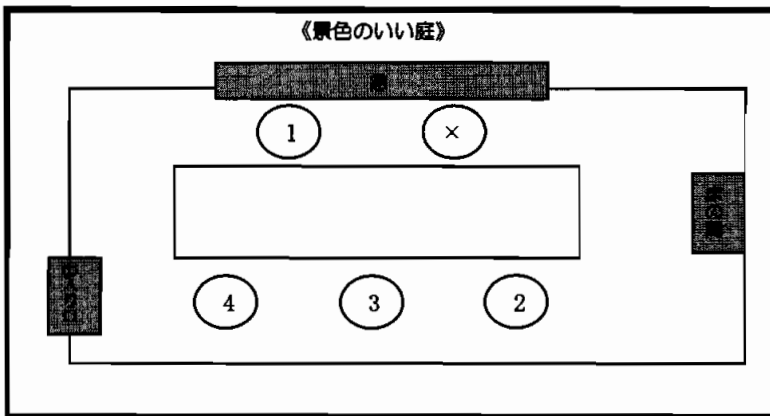


Figure 2. 自分自身を配置した座席番号



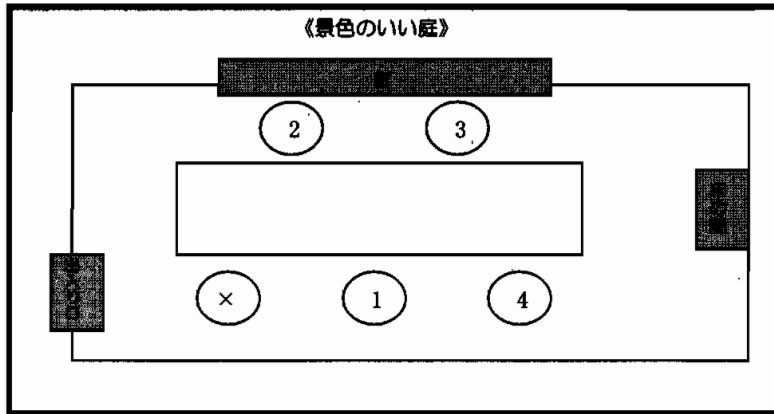
{1:近い 2:やや近い 3:やや遠い 4:遠い}

Figure 3. 自分自身を座席番号1に配置した場合の距離



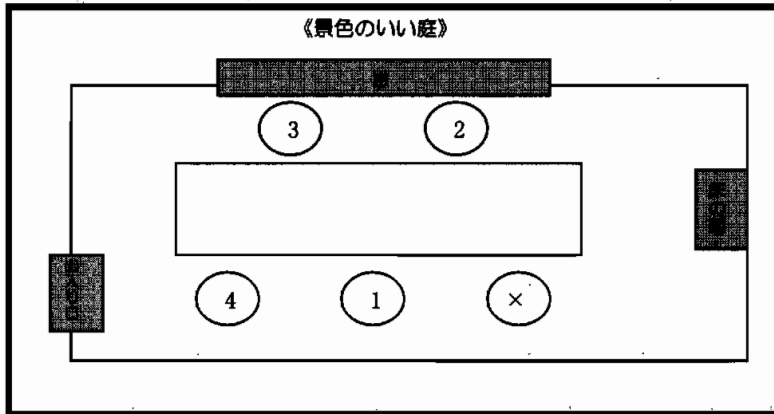
{1:近い 2:やや近い 3:やや遠い 4:遠い}

Figure 4. 自分自身を座席番号2に配置した場合の距離



{1: 近い 2: やや近い 3: やや遠い 4: 遠い}

Figure 5. 自分自身を座席番号3に配置した場合の距離



{1: 近い 2: やや近い 3: やや遠い 4: 遠い}

Figure 6. 自分自身を座席番号5に配置した場合の距離